四日市看護医療大学紀要，vol. 17， No. 1， 2024

〈資　料〉

大学生による絵本の読み聞かせプロジェクトの活動経過と評価

多次　淳一郎*，春名　誠美*，鈴木　真紀子*
北井　真紀子*，馬場　佳理*，小林　左耶花*

Activity Progress and Evaluation of Picture-book Reading Project by University Students

Taji Junichiro *, Haruna Shigemi *, Suzuki Makiko *
Kitai Makiko *, Baba Kari *, Kobayashi Sayaka *

要　　約

新型コロナウイルス感染症の流行による学内外での対人交流機会の制限を背景に，対人援助職を目指す学生と地域に暮らす人々がリモートを含む様々な方法で交流する機会の創出を目指し，絵本の読み聞かせを用いた地域貢献活動に教員有志のプロジェクトとして取り組んだ．中心となる学生と教員で「スマイルオレンジ」というグループを立ち上げた．

メンバー学生は 2022 年度 40 名から 2023 年は 55 名に増加した．教員による四日市市および近隣市町の児童・学童を中心とした福祉団体・施設への周知により，2022 年 11 月～2023 年 12 月で 8 か所の施設・団体から 13 回の活動依頼を受けた．活動できるメンバーを募り延 50 名が参加した．絵本の選択，クイズ等を含むプログラム全体を学生が中心となって企画，実施した．学生からは「子どもの理解や接し方を学べた」等，施設等からは「継続的に来てほしい」等の感想がきかれ，大学の取り組みとして教育，地域貢献の両面で有用である可能性が示唆された．

Key Words：大学生（University Students），絵本（Picture-book），読み聞かせ（Reading）

Ⅰ．はじめに

大学には「地域の中核」として，人材育成に加え，地域の課題解決や発展を支える役割が期待されており，大学の持つ強みや特色を生かした地域貢献が求められている[1)]．三重県北勢地域唯一の医療系大学である四日市看護医療大学（以下，本学と略す）にとって，教員が持つ地域団体等とのネットワークを活かし，学生の保健福祉分野の地域活動への参加を促進することは地域貢献の観点でその意義は大きい．

また学生教育の面でも，医療系学生がボランティア活動に参加することは，他者への共感的理解，専門知識，他者への対応力の強化につながるとの報告[2)]もあり，有意義である．しかし，2020 年から 22 年にかけての新型コロナウイルス感染症（以下，COVID-19 と略す）の流行により，大学生の社会参加の機会が大きく制限された．そのような状況下でも，約 70％の大学生はリモート併用も含め人と交流する機会を求めていた[3)]．

*四日市看護医療大学
* Yokkaichi Nursing and Medical Care University

こうした背景，社会情勢をふまえて，対面接触が制限される状況下でも地域貢献，教育の両面で意義を見いだすことができる活動の場の創出が必要と考えた．

そこで，リモートを活用した先行事例[4]を参考に，対面・非対面いずれの状況でも実施可能なプログラムとして「絵本の読み聞かせ」に着目した．読み聞かせを選択した理由は“聞く側”の幼児・学童[5,6]，“行う側”の大学生[7]の双方に教育的有用性が報告されており，地域のニーズが高く，大学にとっても対人援助人材の育成の点から北勢地域に貢献できると考えたからである．著者一同は2022年にプロジェクトを立ち上げ，北勢地域の幼児・児童関係を中心に高齢，障害など幅広い福祉施設・団体（以下，施設等と略す）で学生が絵本の読み聞かせを行う活動に取り組んだ．

活動開始から1年半が経過し，活動の場が拡大する一方で，今後に向けて新たな課題もみえるようになった．しかし，大学教員主導での地域貢献活動の企画・開催の経過と評価を記述した報告は少ない．そこで，本プロジェクト立ち上げまでの経緯と活動経過を記述し，その評価を行う目的で本稿を執筆することとした．

Ⅱ．活動の方法

1.　着想からプロジェクト立ち上げまでの過程

活動の趣旨に賛同する教員6名（看護学科5名，臨床検査学科1名）で意見交換を通じて活動目的・目標を設定した．全員の了解のもと「大学から地域に届ける絵本の世界」の名称でプロジェクトチームを立ち上げ，2022年度に看護医療交流センターの教員提案プロジェクトへ応募し，予算を確保した．

2.　活動の概要と展開　（図1）

プロジェクトの目標達成のために，①学生の募集とグループ化，②地域の子育て支援関係団体への周知と活動場所の開拓，③団体と学生とのマッチング，④プログラム準備の支援と引率，の4つの活動を設定し，2～3年度程度をかけて取り組むこととした．活動の全体像を図1に示す．各活動の概要は以下の通りである．

1）メンバー募集とグループ化

2022年度（1年目）は，プロジェクトの趣旨と活動の概要をまとめた資料を作成・配布し，関心のある学生を募集した．応募者に対して説明会を行った後，改めて活動に参加を希望する者を募った．参加を希望した学生と教員による情報共有の手段としてSNSを用いたグループ（以下，SNSグループ）を作成した．学生と教員による話し合いの機会を設け，活動を行う際のグループの通称を検討し，学生から出された複数の案から投票で「Smile Orange（スマイルオレンジ）」に決定した．学生の協力を得て作成したチラシを用い，メンバー

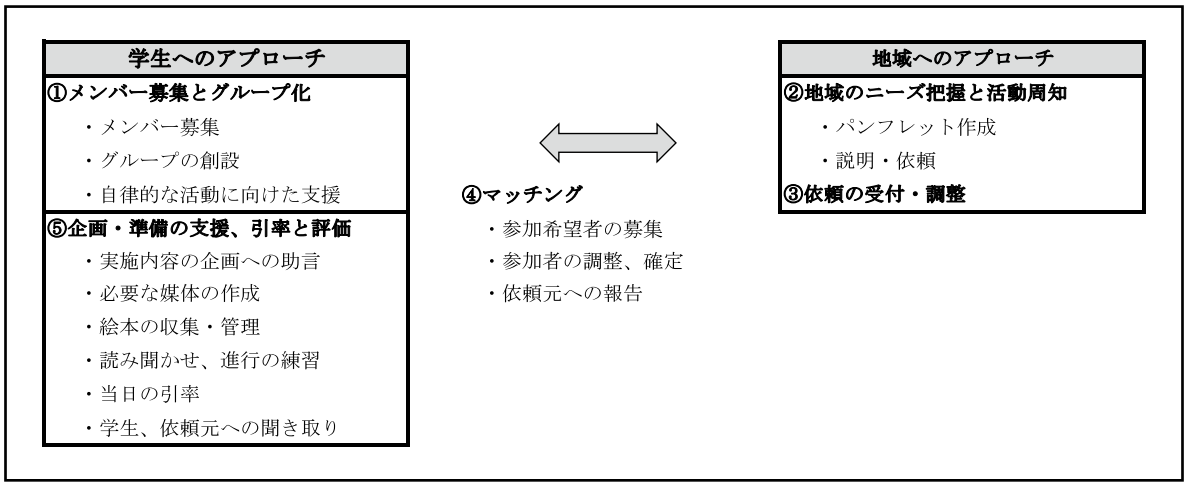

図1　活動の全体像

教員が四日市市内の福祉関係の団体を訪問し周知を行った．実施希望のあった団体ごとに，実施日に参加可能な学生をSNSグループで募り，事前に打ち合わせ，練習を行った上で読み聞かせを実施した．年度内の活動を終えた後，振り返りの機会を設け，次年度に向けた活動について意見交換を行った．また，学生間での話し合いによりリーダーを決定した．

2023年度（2年目）は，メンバーの学生有志でチラシを作成し，新入生歓迎会の際に活動の紹介を行った．希望者を募り，4月中旬に説明会を実施した．その際の資料作成，説明役は教員がサポートしながら，3・4年生のメンバーが主体的に担った．学生の主体的な活動展開を促し，支援する目的で教員によるSNSグループを作成し，活動の参加メンバー募集，活動実施後の感想や気づきを共有する仕組みを構築した．

2）地域のニーズ把握と活動周知

メンバー教員が持つ個人的なネットワークを活用し，保育園等の児童福祉施設を中心に活動を周知し，学生が絵本の読み聞かせを行う場を設けてもらえるよう依頼した．その際，学生が作成した活動紹介のチラシを持参し活動のイメージを持つことができるよう工夫した．

また，四日市市社会福祉協議会ボランティアセンターにも同様の周知を行い，ボランティアセンターに登録されている団体への周知と実施可能な団体等の紹介を依頼した．

3）依頼の受付・調整

周知の後，各担当教員が窓口となり，施設等から希望日時・内容の連絡を受け，必要な調整を行った．

4）施設等と学生とのマッチング

施設等からの希望日時・内容をグループLINEのスケジュール機能を用いてメンバー学生に周知し，参加希望を募った．施設等には参加人数を報告した．

5）企画・準備の支援，引率と評価

窓口の教員は，参加する学生を事前に集め，施設等からの依頼内容をふまえ，①読む絵本の選定，②担当時間内で実施する内容（絵本以外の手遊びなど）の企画と媒体作成，③事前練習の実施を行った．実施日は窓口教員と都合のつく教員が会場に引率した．実施後，施設等スタッフと参加学生から感想や気づきについて聞き取りを行い，活動の評価を行った．

Ⅲ．活動の結果

1.　メンバー募集とグループ化

2022年度にグループへ登録した学生は40名であった．このうち，1回以上，活動に参加した者は24名であった．

2023年度当初の新規参加学生15名を含めたメンバー総数は55名であった．学科別の人数は看護学科49名，臨床検査学科6名であった．

グループ化の取り組みでは，2022年度は教員が実施先の施設等との調整，参加する学生の募集，事前の練習の企画・助言，全ての活動を主導した．同年度末と2023年度当初にメンバーと教員のミーティングを行い，教員からメンバーの学生にグループ化を視野に入れていること，学生からも行いたい活動などを発信してほしいことを伝えた．2023年度は，①学生間でリーダーを決め教員との連絡窓口を委ねる，②イベント毎に参加する学生が集まり，当日の企画，練習などを学生同士で決め，練習する，③活動終了後に参加した学生からメンバーへ活動の様子の報告と気付きをSNSグループで共有する，取り組みを通じて学生の主体的な取り組みとなるよう働きかけた．

2.　施設等での絵本の読み聞かせの実施状況（表1）

2022年10月～2023年12月時点で8か所の施設等で計13回の活動を実施した．

実施した施設等の属性でみると，保育園2か所，学童保育所2か所，児童館1か所，地域交流拠点1か所，高齢者デイサービス1か所と障碍児・家族の会1か所であった．

表 1　絵本読み聞かせ活動の実施状況（2022 年 4 月～ 2023 年 12 月）

活動 No	年	月	主対象	施設区分	参加学生数	備　考
1	22	10	児童	地域交流拠点 A	5	
2		11	児童	学童保育所 B	2	
3		11	乳幼児	保育園 C	4	
4		11	乳幼児	保育園 D	3	
5		12	児童	学童保育所 E	4	
6	23	3	児童	学童保育所 E	3	
7		4	児童	学童保育所 B	4	
8		8	児童	学童保育所 E	3	
9		8	児童	児童館 F	6	
10		8	高齢	デイサービス G	3	ハンドマッサージサークル 9 名と共同実施.
11		10	児童	児童館 F	6	
12		12	障がい	障がい児・親の会 H	7	クリスマス会で実施
13		12	児童	学童保育所 E	2	
			8 施設等 13 回　延 52 人			

3.　活動の実際

一部の活動について，実施内容と参加学生と施設等スタッフから聞き取った感想を示す.

1）保育園 C での実施　（表 2）

2022 年 11 月に学生 4 名が参加し，3 歳児クラスを対象に約 60 分間，絵本 3 冊の読み聞かせに加え，ジェスチャークイズを取り入れ，園児が参加できるようにする，休憩時間を挟む等，園児が集中して参加できるよう工夫を学生は行っていた.

参加した学生は，全員 2 年生で初めての読み聞かせの実施であり，声の大きさや速さ，児の語彙力・理解力に応じた伝え方等，20 人近い 3 歳児に“聴いてもらう”ことの難しさを実感していた．一方で“身を乗り出して”聴き，大きな声で反応する園児の姿に触れ，人と触れ合うことで「参加してよかった」「楽しかった」等の感想がきかれた．保育園からも「子どもたちも集中して聴いていたし，よかった．また機会があればまた参加してほしい」と高評価であった.

2）学童保育所 E での実施　（表 3）

2022 年 12 月に学生 4 名が小学校低学年を対象に，2023 年 3 月に学生 3 名が小学校高学年を対象に，また同年 7 月には小学校低学年向け，高学年向けの 2 部制，計 4 回各 30 分，絵本 2 冊の読み聞かせと絵本の内容に関連するクイズを行った．絵本は季節に応じた内容を選び，読む前に関連するクイズを行ったことで，読み聞かせを集中して聞くことができるように学生は工夫を行っていた．定期的に 4 回，実施したことで，学生と施設スタッフ，子どもとの関係性が深まり，読み聞かせ終了後も残って子どもと学生が交流する様子がみられるようになった．また絵本 2 冊と関連するクイズで 30 分という標準的なプログラムができたことで学生の準備への負担が軽減し，今後の定期実施の見通しを立てることができた.

参加した学生の感想では「子どもたちは想像以

表２　保育園Ｃでの実施内容

活動 No	実施時間	実施内容	備　考
3	50 分	自己紹介	3 歳児クラスで実施
		絵本①	絵本①：白くまのパンツ
		絵本②	絵本②：ねこいる！
		ジェスチャーゲーム	学生と園児の代表がジェスチャーで動物を表現し，他の園児が回答.
		休憩（5 分）	園児の給水のため
		絵本③	絵本③：とこやにいったライオン
		挨拶・終了	

表３　学童保育所Ｅでの実施内容

活動 No	実施時間	実施内容	備　考
5・6・13	30 分	アイスブレーク：自己紹介	絵本はクリスマスを題材とするものを選択
		低学年：絵本の内容にまつわるクイズ	
		季節に応じた絵本を 2 冊読み聞かせ	
8	30 分	（低学年向け）	
		読み聞かせの本に応じたクイズ	絵本は七夕，星を題材とするものを選択クイズはパペットを使用し，子どもが集中できるように工夫
		季節に応じた絵本を 2 冊読み聞かせ	
		読み終えた後に感想の共有	
	30 分	（高学年向け）	
		読み聞かせの本に応じたクイズ	絵本は七夕，星を題材とするものを選択
		季節に応じた絵本を 2 冊読み聞かせ	
		読み終えた後に感想の共有	

上に元気で圧倒された」「低学年と高学年とでは聴く集中力が違い，成長時期の違いを実感できた」等，実際に様々な年齢の児童に接したことで多くの気付きを得ていた．施設からは「季節ごと年 3～4 回イベントとして来て欲しい」との要望がきかれた．

3）高齢者デイサービスＧでの実施　（表 4）

先に読み聞かせを行った子ども関係の施設からの紹介を受け，同法人が運営する高齢者デイサービスで 2023 年 8 月に実施した．実施にあたっては，施設のニーズをふまえ，担当教員同士で情報共有し，本学ハンドマッサージのサークルと共同で取り組んだ．事前準備としてスマイルオレンジの学生とハンドマッサージのサークルの学生が一緒にハンドマッサージの練習を行った．当日は，学生による合唱，利用者 1 人ずつに学生 1 名がついてハンドマッサージを行った後，①絵本 2 冊を用いたクイズ（例：野菜の断面図の影絵を示し，何の野菜かを問う），②回想（利用者の幼少期・青年期を振り返る）につながる絵本の朗読，で約 60 分実施した．

表４　高齢者デイサービスＧでの実施内容

活動 No	実施時間	実施内容	備　考
10	60 分	学生挨拶、歌唱 ハンドマッサージ クイズ 紙芝居「舌切り雀」 レクリエーション 挨拶　終了	ハンドマッサージ：利用者１名に学生１名が付き、個別に実施。 クイズ：昔の遊びがテーマ レクリエーション：参加型絵本２冊

学生からは「ハンドマッサージを行うと利用者さんの表情が和らぎ，気持ちよいという声も聴くことができた」「一方的に読まず，絵本を通じて考えたり，やり取りができる方法にしたことで，利用者の皆さんにも笑顔で参加してもらえる内容にできたと思う」等の感想がきかれた．施設からも「利用者さんがいい表情だった．また来てください」との感想，要望がきかれた．

Ⅳ．考　　察

本活動は絵本の読み聞かせを手段として介在させ，プログラムを求める地域の施設等と活動したい学生をつなぐ試みである．その点をふまえ，施設等からの評価からみた地域貢献としての活動の意義，学生の評価からみた活動の教育的意義について考察する．

1.　施設等からの評価からみた活動の意義

活動開始から約１年６か月の活動で８か所の施設等と接点を持つことができた．このうち１つの施設は他施設からの紹介であり活動開始当初，児童分野を中心に考えていた活動範囲の想定を超えて短期間に活動範囲の拡大につながった．これらの実績は，四日市市を中心とした北勢地域で大学とつながり，大学生の力を借りたいという福祉保健分野のニーズの潜在を示していると考えられる．しかし，実習先等として元々大学の存在を認知されてない福祉施設や当事者組織から大学に働きかけることは現実的に難しいため，大学側が学生のニーズを含め「できること」を地域へ発信し，地域側のニーズを拾い，出向く姿勢で取り組むことが重要といえる．

学生の読み聞かせに対する施設等の評価も総じて高く，活動自体が施設等にとって満足できる内容で提供できたと考える．活動開始初期においては，参加する学生側の読み聞かせに対する経験値もない中での活動であったことから，初年度は各活動前に教員が主導して事前の練習も行った．この事前準備が当日の比較的円滑な実施につながり，受け入れた施設等からの評価につながった一因と考える．絵本の読み聞かせは幼児・児童教育における教育技術[8]であり，根拠に基づく実施上のポイントを押さえた上で経験を重ねることで習熟していく．そのため，中長期的には学生主導の活動を目指すとしても，活動の開始初期には，参加する学生の活動の質が担保できるよう教員が積極的に助言・指導を行うことが，地域貢献の趣旨に照らして重要であると考えられた．

以上より，絵本の読み聞かせを用いた活動は地域のニーズに合致するものであり，その技術的な質を保持できるよう教員が継続的にサポートしつつ，継続的な活動へ発展させる意義を見出すことができた．学生が持つ関心や力を活かし，彼らが活躍できる場として今後定着させることができれば，大学が地域に認知され，求められる存在となる一助にもなると考える．

2.　学生の評価からみた活動の教育的意義

活動に参加した学生の感想からは，学生は子ども，高齢者等対象の違いに関わらず，参加者の反応や活力等に触れ，対人援助の基本となる対象の理解，コミュニケーションに関連した技術を学んでいた．本活動では，絵本の読み聞かせを活動の

主たる手段として用いた．絵本の読み聞かせが看護学生にもたらす教育効果については多数，報告されている．大澤[9]は読み聞かせは子どもへの向きあい方を考える機会となり，理解する糸口として有効とし，また原嶋ら[10]も読み聞かせが子どもの特性を理解する機会となる，と述べている．学生の感想でも，子どもの特性を知り，向き合い方を考える機会になったという記述が多くみられた．このような経験に基づく能動的な気づきは学習意欲や動機を高める一因になると考えられる．本学では，看護学科，臨床検査学科ともに1，2年次は座学での講義，学内演習が中心で，3年次以降に本格的に臨床実習が開始される．そのため，学内では援助対象者と直接，接する機会が少ない．特に低学年の学生が課外活動を通じて直接，様々な対象と接する機会を得られることで，将来を見据えた学習意欲の向上にも資することができるのではないかと考える．また，小児保健看護関係科目として取り組まれた先行事例[9,10]と異なり，本活動は課外の自主的活動であり，単に読み聞かせを行うだけでなく，対象の特性と要望に応じてプログラム全体の企画から絵本の選定等も担うことで，学生が能動的かつ実践的に学ぶ社会学習としての効果もあったと考える．このような課外活動での絵本の読み聞かせの教育効果については報告がないため，今後は研究として，活動に参加した学生の経験と得た学びについて系統的な調査を行うことは意義あることと考える．

3. 今後の課題

8か所の施設等と接点ができ，すでに複数回実施したところも含め，いずれからも継続的な活動の要望がきかれている．活動開始初期から活動の中心を担った4年生が卒業する時期となり，これまで実施した施設等での活動を継続できる体制の維持が当面の課題である．低学年への“世代交代”が円滑に進むよう，今後は一部の友人関係にあるメンバーだけでの構成とせず，複数の学年の学生が参加できるように調整し，上級生からのサポートを受け低学年の学生が読み聞かせなどの中心を担うことができるよう教員が調整する必要がある．一度，“世代交代”を経験することで，以降，学生間での主体的な役割交代が可能なグループへの成長につなげられると考える．

地域貢献の面でみれば，さらに活動の場を拡大していくことは可能と考えられるが，グループの発達段階[11]で考えると現状はまだ形成期であるため，当座はその発達を促すことを優先し，8つの施設等で定期的に活動を継続できるよう，教員が学生の能動的な取り組みを促し，成功体験を共有し，修正等が必要な場合に助言を行うことで，協力して活動を展開していく必要があると考える．

本稿で示した活動は2022年度，2023年度の四日市看護医療大学看護医療交流センター教員提案事業として承認され，費用助成を受けて実施した．

文　献

1) 文部科学省中央教育審議会：これからの時代の地域における大学の在り方について；地方の活性化と地域の中核となる大学の実現（審議まとめ）．https://www.mext.go.jp/content/20220112-mxt_koutou01-000019888-001.pdf．2023.8.31
2) 坪谷尚季，舛本大輔，岡村聡，他（2022）：小児がんキャンプへのボランティア参加が医療系学生に与える教育効果，三重大学高等教育，28，55–58.
3) 文部科学省：新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査（結果）．https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt_kouhou01-0000045020_1.pdf．2023.8.31
4) 山岡義卓（2020）：コロナ禍における大学生の地域連携活動について；小学生とのオンライン交流会の事例より．国際経営フォーラム，31，347–361.
5) 雨越康子，森下正修（2020）：幼児期の集団および家庭における絵本の読み聞かせと認知能力，日本教育工学会論文誌，43(4)，339–350.
6) 橋本忠和（2020）：絵本の読み聞かせによる社会情動的スキル育成の可能性についての一考察，北海道教育大学紀要（教育科学編），70(2)，321–332.
7) 網野裕子，沖本克子（2019）：小児看護学実習（保育所実習）における「絵本の読み聞かせ」に関する学生の学び，岡山県立大学教育研究紀要，3(1)，7–1–7–9.

8) 岩谷恵利子，上月康代（2020）：保育者養成校における絵本の読み聞かせの技術習得に関する一考察，姫路日ノ本短期大学紀要，42，23–31.
9) 大澤早苗（2005）：「絵本の読み聞かせ」を小児看護技術演習に取り入れた有効性，日本看護学会論文集：小児看護，36，134–136.
10) 原嶋朝子，霜田敏子，井上寛隆（2006）：看護護学生の絵本作りと読み聞かせの自己評価，日本看護学会論文集：看護教育，36，344–346.
11) Tuckman, BW (1965): Developmental se-quence in small groups, Psychologic-al Bulletin, 63(6), 384–399.